

# 毛利兵橋重政とその系譜について(一)

御手洗 一而

(会員・埼玉県川越市)

はじめに

兵橋は兵吉とも書く。先に「佐伯史談」一二〇号で、重政と高政の異母弟である吉安について、同一人物視する毛利系図の誤りを指摘しておいた。

『佐伯史談』は、毛利氏略系図の森吉安の右肩書に、「称毛利兵橋重政」と入れ、右肩書に「初兵橋又権六、後九郎左衛門尉」と記しているがその根拠と解釈に疑問がもたれる。

その時は、高政公の伝記を書く上での矛盾から、二三の資料を示し、確証があったわけではなかったが、その後、重政の系譜につながる御子孫、徳島県阿波郡市場町町筋在住の森秀郷氏、東京青山在住の三浦喜慶氏より御賛同とともに、重政や重政の叔父監物に関する幾多の貴

重な資料を御教示戴いた。

本稿は、佐伯地方に初見のその資料を整理紹介することによって、重政の人物像を明らかにしていきたい。吉安については、すでに説明しつくされているので、重政の系譜の論述は、そのまま吉安と別人であることの証明になると思う。

しかしそこには、吉安が重政に擬せられたり、重政を高政と兄弟とする幾つかの理由ある混同が秘められている。

その根拠と理由について、私見を交じえながら論を進めることにする。

高政・重政・吉安を混同する根拠

重政と吉安を同一人物に擬す起因は毛利上申書にあるが、それを立証する資料がある。

『徳川実紀』第二篇 大猷院殿御実紀

卷十二 寛永五年十一月十六日項

(必要部分のみ) この高政もとは豊臣の家士九郎左衛門高次が子にて森勘八郎といふ。天正十年六月羽柴と毛利輝元と和睦のとき。高次。弟兵橋と共に毛利へ人質に参りけるに。以下略

ちなみに、「佐伯市史」は、「高次」の所に「高政は」と書き換え、兵橋の次に(吉安)と記している。この解釈が問題である。

実にあいまいな文章であるが、毛利家から徳川幕府への上申書は、恐らくこう説明されたのであろう。そのためか、高次と兵橋を兄弟とする説もある。この一文は、高政及び高政兄弟が文献上に現われる初見であるが、高政や高次が実名であるのに、弟だけ兵橋と呼称になっている。兵橋は重政の呼称であるが、前記した毛利氏略系図によれば、吉安を指すことになる。

上申書は何故に兵橋を吉安あるいは重政と明記しなかったのであろうか。当時毛利藩は吉安を兵橋になぞらえたが、吉安と明記するには次の説明の如く年齢的に無理がある。そのためか重政とも書けなかった。手許にある「毛利家御系譜」の写しでは、吉安について、九郎左衛門のほか実名の記載はない。反面、後述する同譜中の勘右衛門の系統にも、兵橋以外に重政の実名の記載はない。要するに、吉安を弟兵橋とほかすことにより、重政の存在は毛利藩にとって都合の悪いことになる。そのためか、佐伯地方に重政の資料は残されていない。

この高松城人質の一件について、「寛政重修諸家譜」には、「毛利家より穴戸某を質とし、太閤よりは高政を質たらしむ」とだけあって、弟に関する文字はない。

たゞし同書には、次項に述べる兵橋系の系譜が上申されていたため、兵橋重政の実在人物に対して、吉安を擬人化することは出来なかったようである。

この高松城の攻防戦は、天正十年の出来事で、『戦国人名辞典』から年齢を換算すると、高政は二十四歳で吉安は十歳である。吉安の従軍は考えられないから、この時の人質は重政のことである。ちなみに重政は三十三歳

であるが、重政と吉安を同一人物とするため、「戦国人名辞典」さえも、九歳年長の重政を高次の次男とする矛盾をおかしている。

これらの混乱は、徳川に認められた高政と、豊臣從臣で没した重政系との関係から、豊臣徳川の政權交替にも起因すると思われるが、毛利家にも何かの事情が察せられる。

この混乱を解明するには、高政・吉安の異母兄弟と重政との間柄を解くにつきる。次は重政の家系を追って追求してみたい。

### 重政の父母について

現在残されている諸本や系図は、重政と高政を兄弟とする説が多い。これは単に吉安を重政になぞらえるだけではなく、高政・吉安の異母兄弟と新たに重政が兄弟であるとする説である。その根拠を「寛政譜」の前記した兵橋系の家譜から示す。（藤原氏支流・高政の項、後段）

毛利兵橋元苗が今の呈譜に家祖十郎左衛門重高永祿四年（一五六一）死す。法名元水。長男兵橋（後豊後守）

重政は当家の祖にして二男伊勢守高政は彼家の祖なり。もと平氏にして森を称す。

この譜は、明らかに重政と高政を兄弟にしている。ただし、重政が長男で次男を高政とし、吉安名を見ることなく歴然と区別している。この重政系と高政系の分離ははっきりするが、家祖十郎左衛門重高の書き方はあいまいである。次に長男の書き出しは父を意味するものであるが、当家の祖とだぶっている。

元苗とは、後述する重政の子重次が流浪の末、片桐且元を頼り、のち徳川に仕え、備中小田郡の内三百石を領した後裔である。（小田郡誌・上巻）

さて、重政の父は重高として、高政の父を重高とするには問題がある。高政の父が九郎左衛門高次であることは、毛利系図や「鶴藩略史」、詳細は省くがその他の史実で明らかにされている。

この重高名を検討するに、もと平氏といい、十郎左衛門は高次が家督を継いだ兄高次の呼称と同じであり、法名は高次の法名元水と同じである。永祿四年（一五六一）

に死んだ重高が慶長二年（一五九七）に死んだ高次の法名と同じというのも単なる偶然とは考えられない。何かの作爲は、信憑性を云々する以前に、重高自身の存在まで疑わしくなる。

以上の理由やら前記した年齢の矛盾から、同譜は終りに、「しかれどもみな證なきがゆへ、しばらく各家の伝説により彼はもとの如く大江氏に収め、是は藤原の支流に附す」と注意書きをえている。

要するに、兵橋重政の系統を大江氏に、高政系を藤原氏支流にするのは、『寛政諸家譜』の制作整理上の問題である。

ついでながら、この時代に、奏宿祢流の神職に森重高なる同姓同名の人物がいたが、元和元年の卒となっている。（日本家系家紋研究所発行・森一族より）

重高に関する私見は別項に譲るとして、重政の母については、「速見郡・藤原村史」に織田信昌の女とある。

高政の母は、『鶴藩略史』によれば、瀬尾小太郎の女で、「佐伯茶飲話・高政公の深慮」の項に記載があり、重政と高政を実の兄弟とするには歴然とした食い違いが

ある。

尚、重政の母とする織田信昌の女については、重政が日出城代となって出世した当地だけに記録が残り、後述する重高の時代に、果たして織田家と婚姻を結ぶ程の家系であったか疑わしいが、重高夫妻の資料は皆無故、唯一つの資料として付記しておく。

#### 兵橋重政の叔父森監物について

重政・高政の兄弟論の前に、兵橋側の資料を紹介する。兵橋の叔父とする監物の家系の資料である。

前項で重政の父重高の信憑性について書いたが、蜂須賀家に仕えた森一族の藩士家系の覚書の中に、この重高の名があるから必要部分を抜粋する。

森久兵衛 四百石

尾張国住人 森十郎左衛門重高弟

初代 森 監物

初名勘。右衛門。尾州森之邑ニ出生仕候。略。右小左衛門（監物嫡子・筆者注）儀戦死仕監物儀外ニ男子無御座候。小左衛門歳若妻子所持不仕其以後八九ヶ年経候へ

共家督之儀被仰出も無御座候所監物。甥。毛利兵橘より。略。監物儀及晩年候間。彼方へ引取申被旨御所望仕候。右監物。甥。森。兵。吉。重。政。弟。森。勘。八。高。政。始。信。長。公。へ。仕。申。候。所。云。々。

ついでに、蜂須賀藩士譜より監物の略歴を記す。

初代 森 監物 某

初名 勘右衛門。

隠居号 宗慶

① 福聚院様 尾州召出

② 高五千五百石

③ 西條城代

④ 隠居年月不詳

隠居料高二百五十石被下

慶長二酉年五月没

久兵衛は家祖とする監物の四代目に当るが、覚書は重政と高政を兄弟とし、監物と重政を叔父甥の關係と記している。そして監物は重高の弟になっている。この久兵衛系の覚書と前記した元苗系の家譜といずれが先に重高

名を記したか明確でないが、「毛利家御系譜」は重高名は見られず、監物こと勘右衛門は明記しているが、その続柄は示されていない。

ところがこの監物は重高と異なり、華々しい史実の中に、確実な足跡を残している。

#### (一) 蜂須賀正勝の書状

当国之様子諸式以一書阿波守に申渡候間、被得其意、不及申候へ共、国衆、並今度渡海之御牢人衆、御堪忍候様に、御心付肝要に存知候、阿波守若候間、何事も諸事被引取御異見憑存候、若又各御才覚にも不被及之儀候は、拙者かたへ可被仰候、恐々謹言。

蜂須賀彦右衛門尉

正勝(花押)

十一月三日

稲田太郎兵衛尉殿

牛田又右衛門尉殿

林 五郎衛尉 殿

中村次郎左衛門尉殿

山田八右衛門尉殿

森 勘右衛門尉殿

西尾理右衛門尉殿 参、人々御中

宛名の七名は、正勝が子家政のために、目付として、蜂須賀の将来を依頼したものである。この森勘右衛門は監物であり、正勝と共に墨股以来行動を共にした稲田の名も見える。

監物の地位については、先に藩士譜を引用したが、西城城代として高五千五百石は、秀吉が四国平定の論功行賞として、蜂須賀に阿波一国を与えた中から分与せられたものである。この時重政も阿波板東郡河崎村・三俣村一千八十余石を受領している。重政の始めて独立した知行である。(蜂須賀家譜・寛政譜)

稲田や監物の重臣名は、今年七月愛知県で発行された(コピーのため都市名不明)「江南郷土史研究会 会報」(46)から、その名を察知出来る。

(二) 江南郷土史研究会 会報 (46)

必要部分のみ

元亀元年金ヶ崎出陣に当り、藤吉郎は江州坂本に、兵を集め出陣したが、坂本寄騎候人数の覚が武功夜話にある。

一、藤吉郎殿御一統中、足輕隊合六百有余の人数  
木下小一郎殿、浅野又左エ門、林藤兵衛、安井弥兵衛(尾州宮後の人) 是人藤吉郎殿坂本陣所駆付けの人

一、藤吉郎殿寄親、寄騎の衆

蜂須賀彦右エ門手の者、稲田大炊、大八郎、日々野六大夫、長江半之亟、森五兵衛、岩田七左エ門、松原内匠、蜂須賀小十郎、梶田隼人、村瀬左馬助  
右人数参百五十有余人

稲田大炊と森五兵衛の名が見える。この五兵衛が監物である確証はないが、森一族であることには間違いない。この時すでに重高は没している。後日蜂須賀の目付として重責を託される地位は、この五兵衛が稲田らとともに重臣となる可能性が強い。あるいは監物であるかもしれない。

尚、この時、微禄の藤吉郎の集団は、岩さえ持たない郷士の集りである。前述した重政の母、重高の妻とする織田信昌の女との婚姻は勢力的に矛盾を感じる。織田と毛利との関係は、斯波氏から毛利を継いだ毛利秀頼一族との混同が見られる。

(三) 「森監物の墓 地蔵寺で発見」

これは昭和五十二年三月九日付の徳島新聞の報道の見出しである。同紙は、

「安土桃山時代中期から江戸時代初期にかけて県内にあった阿波九城の一つ、西条城の初代城主、森監物の墓がこのほど板野郡板野町羅漢、四国霊場五番札所、地蔵寺の境内で見つかった。略」  
として、森一族解明に手がかりとしている。

以上の如く、監物の資料は実に明確であるが、その監物の系譜でさえも疑わしい肩書をつけた重高を兄として名を記している。重政と高政が兄弟で、重高・監物が叔父であれば、当然毛利系図の政次・高次はこの重高・監物と兄弟ということになる。

しかし、前記した元苗系と久兵衛系に、重高と監物が兄弟であっても、この兄弟が毛利系図の政次・高次兄弟と結びつく根拠は何もない。重高・監物と政次・高次の関係を兄弟ではないかとする論理は、唯、前述した通り、歴然として両親の違う重政と高政を兄弟とすることによってのみ成立する間柄である。かといって、重政と高政は、高松城の人質に見る如く、兄弟のように常に行動を共にしていることは事実である。

そのためか重高は、毛利氏略系図の政次の呼称をつけたり高次の法名をつけて、とにかく毛利氏との結合を試みている。私は先にこの重高の存在を疑ったが、これまでの経緯からおして、重高の存在は別にしても、重政を媒介とする毛利氏との縁は、単なる作爲的なものその他に何かを認めねばならないと考えている。では何故に重政が兄弟にされるか、その理由根拠について、次はその間の事情を考察してみたい。

(つづく)